

出現期前方後円墳をめぐる二、三の問題

－京都府黒田古墳の再評価－

高野 陽子

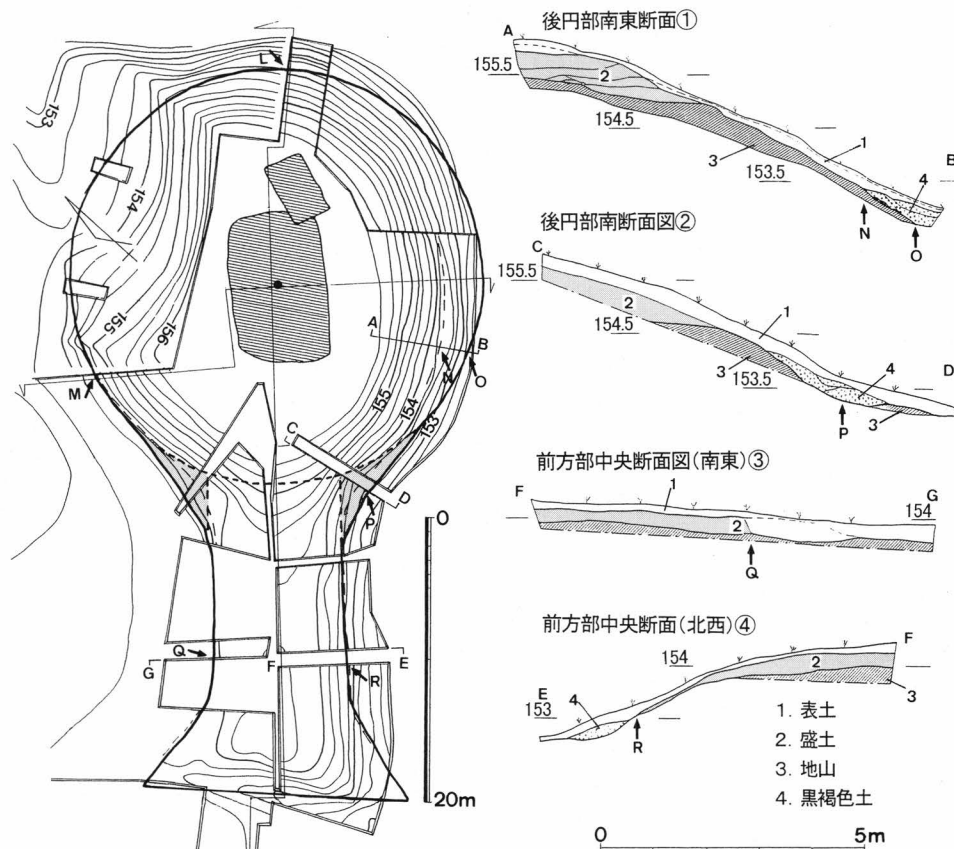
1. はじめに

1980年代の後半から1990年代の初頭にかけて、全国的に発掘調査件数が急増し、各地で弥生終末から古墳時代にかけての墳丘墓が調査され、その位置づけをめぐり、弥生墳丘墓と古墳の区分が問題となった。1988年に津古生掛古墳の所在する小郡市で開かれた埋蔵文化財研究集会のテーマは、「定型化する古墳以前の墓制」であり、この年には、寺沢薫が「纏向型前方後^(注1)円墳」を提唱するなど、箸墓古墳以前の前方後円形墳墓の問題が大きく取り上げられている。1990年の京都府南丹市園部町に所在する黒田古墳^(注2)の調査は、まさにこうした前方後円墳の出現の問題がクローズアップされていた時期に重なり、最古級の前方後円墳の調査として衆目を集めた。当時、筆者は学生として、黒田古墳の調査に加わったが、出現期古墳の調査としては、類例のない規模と内容をもつものであり、明確な位置づけを成し得えずにきた。調査から十数年を経て、この間、畿内中枢の大和古墳群を構成する古墳の一つ、ホケノ山古墳の調査が実施され、箸墓古墳に先行する大和の出現期前方後円墳の実態が明らかになりつつある。ホケノ山古墳は、墳丘や埋葬施設の構成要素や、出土土器の系譜など、黒田古墳と多くの類似性があり、改めて前方後円墳出現期における地域間の相互作用、影響関係の解明が大きな課題であることを印象付けた。

小稿では、近年の出現期古墳の調査成果や、丹波地域における墳墓や集落の調査成果をも踏まえて、改めて黒田古墳を再評価し、「定型化」した前方後円墳の成立前夜における地域間関係を明らかにするとともに、古墳出現期における畿内周辺部における墓制の変革とその意義について考察したい。

2. 墳丘の築造規格

黒田古墳は、撥形に開く発達した前方部を特色とする全長約52mの出現期前方後円墳である。墳丘の築成は、丘陵端部に築くことによって、「丘尾切断」型の造成が行われている。墳丘は、墳丘高2mを測るにすぎないが、平野部との比高差は基底部で約5mをなし、



第1図 黒田古墳の築造規格

墳丘規模をより大きく見せるための高い視覚効果がある。盛土は、後円部東側で約0.6～1 mの高さで確認されているが、墳丘の3分の2以上は、丘陵地形を利用したものである。墳丘には段築および葺石は認められず、この点は、段築と葺石を有する奈良県ホケノ山古墳と大きく異なる。

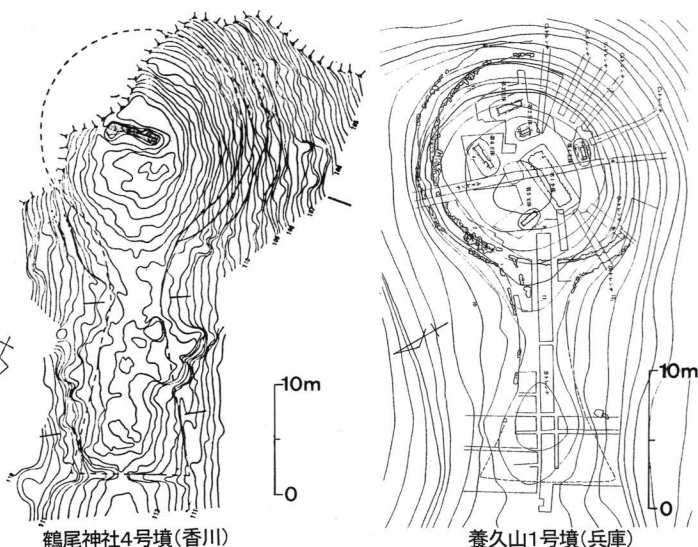
墳形については、後円部は現状では楕円形を呈するが、当初の築造規格は異なるとみられる。丘陵側(北西部)は大きく削平され、また平野部側(南西部)では、傾斜が連続的に平野部側につづいており、報告書に掲載された断面図(第1図)①では地山の成形は明瞭でない。後円部の復原にあたっては、第1図に示した後円部端の傾斜変換点L点、後円部南西のM点を通る円弧を墓壙中軸で反転させると、丘陵側はほぼ正円形を描くことができる。報文の平野側復原ラインは、断面図①(A-B)のN点でとられたものであるが、この部分は初期流土と考えられる黒褐色土の堆積土の上層にあるうえに、断面図では明瞭な段差を認めない。むしろ前述したL・Mの各点を通して、墓壙の中心点を円弧の中心として後円部を復原すれば、問題の後円部平野側は、初期流土と考えられる黒褐色土の下層にある傾

斜変換点0点で捉えることができ、ほぼ正円形の規格を復原することができる。古墳は丘陵の先端部に築成されているため、後円部の平野部側の傾斜は、丘陵の急峻な傾斜面に連続的に繋がっている。こうしたことから、後円部は、本来の規格としては、正円形の築造規格を持ちながらも、おそらくは地形の制約を受け、特に墳丘の平野部側については墳丘の規格どおりの築成を困難なものにしたとみられる。

黒田古墳の墳形を各地の出現期古墳と比較した場合、最も大きな特色は、発達した前方部にある。寺沢薫が古墳出現期の特徴的な墳丘形態とした「纏向型前方後円墳」^(注3)は、前方部が口縁部の2分の1と短いことが特徴であるが、黒田古墳の墳丘比はおおよそ3対2であるため大きく逸脱し、箸墓古墳に近い数値を取る。それゆえに北条芳隆は、黒田古墳を「箸墓類型」に繋がる形態として、その帰属時期に注目する^(注4)。後円部径比に対する前方部長比は、箸墓古墳は0.75で、黒田古墳は0.79であり、大和における庄内式期の墳墓に、今のところこうした数値をとる規格は求められない。纏向古墳群中では、かつて庄内式新段階、寺沢庄内3式とされた勝山古墳が0.7という近似値を示すが、周濠の調査によっていわゆる布留0式土器が出土しており、築造年代は従来よりも後出する評価がなされている。類例をほかに求めれば、庄内式新段階下川津V式とされる香川県鶴尾神社4号墳^(注5)が示す0.85のみである(第2図)。鶴尾神社4号墳の墳丘形態は、早くに都出比呂志が指摘したとおり^(注6)、兵庫県養久山1号墳と高い類似性をもつ。0.80という高い比率を示す養久山1号墳は、土器の出土をみず、時期の確定が困難ではあるものの、おおよそ布留式最古段階を下限とする認識で一致するようであり、その後の丁瓢塚古墳などへの墳形の地域的な系譜関係を勘案すれば、前

方後円墳出現期にみる発達した前方部の形成は、既に指摘されているように東部瀬戸内地域の地域色の一つとみるべきであろう。

黒田古墳の墳形の特色で特に注意されるのは、後円部との接合部、すなわちくびれ部にゆるやかな

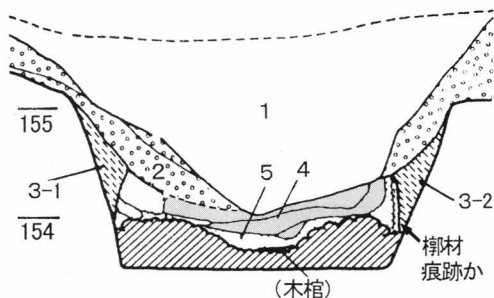
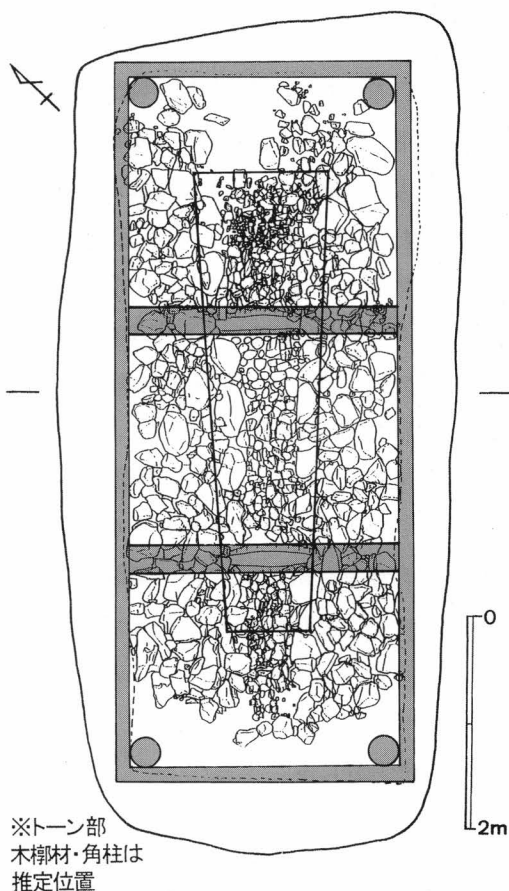


第2図 発達した前方部をなす出現期前方後円墳

スロープが形成されることである(第1図網線部分)。くびれ部西側では、標高154.0mのコンタ周辺でゆるやかなスロープを形成し、東側では標高153.25mのコンタ周辺(断面図②)の傾斜変換点までに、同様のスロープが形成される。このスロープは、寺沢薫が纏向型の細分の指標とし、「連結部」として注目したものである。先にあげた鶴尾神社4号墳にもこの「連結部」がみられ、前方部端は撥形に開き、前方部幅は中央部が細くなる特色ある形態^(注7)をなす。黒田古墳では、くびれ部上部が引き締まる一方、下部では「連結部」を形成している点や、裾部が撥状に開き、中央部が相対的に細くなる傾向は、鶴尾神社4号墳との共通性をもつ。こうした特色や、発達した前方部の形成から、黒田古墳の築造規格は、畿内中枢からの波及を考えるよりも、瀬戸内沿岸部との関係性のもとに評価されるべきであろう。

3. 埋葬施設の系譜

黒田古墳の中心主体部は、奈良県ホケノ山古墳の調査成果から、岡林孝作らは近年、木槨墓として再評価して^(注8)いる。黒田古墳の調査では、調査当時から、墓壙の下段が深さ1.5mの規模をもち、壁体が垂直に近い角度で立ち上がることから、棺上面に空間があったことが疑われ、木槨の可能性も視野に入れながら、調査が進められた。土層断面の観察からも、下段墓壙の掘形に密着して、灰色粘土が検出されるなど、その可能性は疑われたが、保存の問題から、徹底した断ち割り調査は行われ



1. 黒灰色土 2. 黄褐色土Ⅰ 3-1. 灰白色粘土
3-2. 赤褐色混灰白色粘土 4. 黄褐色粘土Ⅱ
5. 黄褐色粘土Ⅲ

第3図 黒田古墳主体部復原図(下段墓壙)

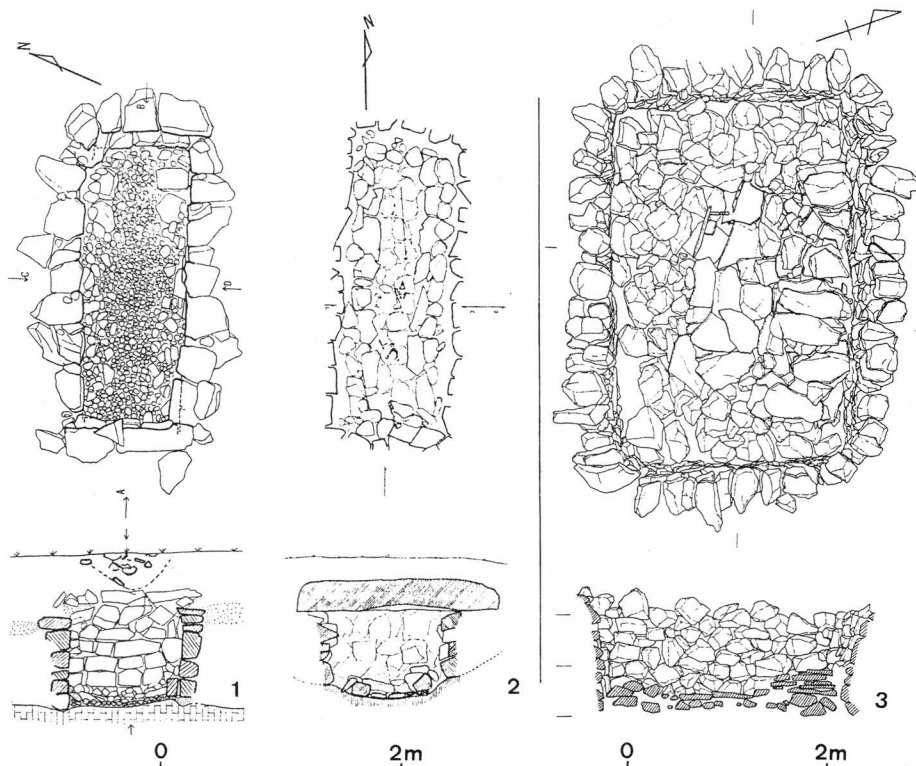
ず、礫床を囲む木槨材の痕跡は未検出であり、当時、木槨墓とするには至らなかった。調査のなかで、性格不明なまま残されたのは、棺床の礫敷の主軸に直交して、石材が欠如する部分が2箇所認められたことであり、小口板材の差込み坑とするにも木槨が上部を覆うために問題があった。この点の解明に糸口を与えたのが、ホケノ山古墳の調査である。ホケノ山古墳では、棺床の礫敷きに墓壙短辺に平行して空隙があり、この部分に木槨の側板を支える横梁となるまくら木が埋め込まれたことが判明した。黒田古墳では、礫敷き上の石積みの除去はしていないため、礫敷きが欠如する部分の平面的な輪郭を確認していないが、岡林孝作らが復原するように、左右に拡張し、まくら木の使用の痕跡とみるのが妥当であり、墓壙短辺に平行して配されたまくら木痕跡の一部を検出していたものとみられる。黒田古墳は、木槨側板および木柱痕などは未検出ではあるが、ホケノ山古墳の棺床構造に照らせば、指摘されるように、木槨墓とみるべきであろう。

黒田古墳の埋葬施設の構造では、礫床にも注目する必要がある。同古墳の礫床は、舟底状をなす木槨の底部に沿うように、石材を低く積んだ特異な構造をなす。竪穴式石槨が槨として、棺身を包む石材を垂直に積み上げるか、あるいは持ち送り、壁体を構築するのに対し、黒田古墳の礫床は、棺床構造が発達したものであり、断面がゆるやかなU字形になるよう石積みし、棺底面のカーブに沿って、石積みの両側で棺身を支える構造である(第4図)。棺の両側に石積みをなす礫床は、ホケノ山古墳にもみられるものだが、その初現はやはり瀬戸内地域にあり、岡山県黒宮大塚弥生墳丘墓や金敷寺裏山弥生墳丘墓、徳島県石塚山2号墓などの棺床構造に類例がみられる(第5図)。黒宮大塚弥生墳丘墓と金敷寺裏山古墳の棺身は、いずれも舟形木槨と推定される。こうした棺床構造と舟形木槨が弥生時代後期末～古墳時代初頭の吉備においてセット関係で出現しており、畿内中枢の首長墓を構成する要素として組み入れられている点は、この地域との強い関係性を示すものとして重要である。

舟形木槨は、元来、丹後地域の弥生後期の墳墓で採用された棺形態であるが、弥生後期～庄内式古相の棺形態は基本的に組合せ木槨であり、周辺地域に広く波及する様相はみられない。庄内式新相に畿内中枢で出現する舟形木槨の系譜については、丹後の木槨



第4図 黒田古墳の棺床(南丹市教育委員会提供)



1. 黒宮大塚弥生墳丘墓(岡山) 2. 金敷寺裏山弥生墳丘墓(岡山) 3. 石塚山2号墳(徳島)

第5図 棺床に石積みをもつ竪穴式石室

形態がダイレクトに採用されたというよりも、むしろ山陰地域を媒介にして、吉備に伝えられた舟形木棺が、竪穴式石室や礫床などの瀬戸内沿岸部の埋葬施設の属性とともに、畿内中枢の首長墓に取り入れられたと考えるべきであろう。黒田古墳の棺は、コウヤマキ製であり、長さ約4mあまりの長大な棺を使用する。礫床は棺形態に合わせて、両側の石積み徐徐に狭め、長大な棺に対応する棺床を作り出している。この点について、柳沢一男は、長大な刳り抜き木棺の使用が、近畿地方を中枢とする上位層の棺制として定立したのではないかとし、黒田古墳とホケノ山古墳の木槨規模の顕著な規格性を指摘する^(注11)。

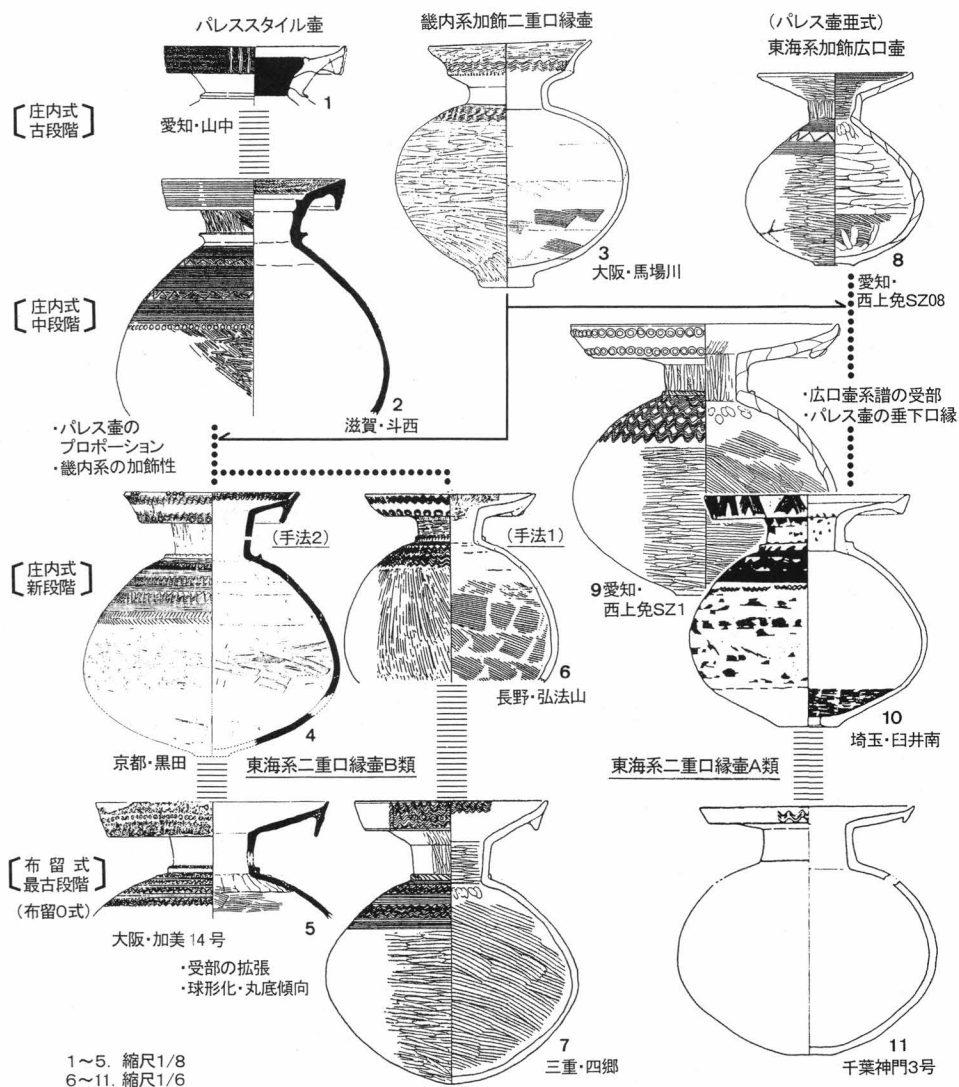
黒田古墳とホケノ山古墳にみる埋葬施設は、木槨墓、礫床、(コウヤマキ製の)舟形木棺の各要素を総体として捉えると、いずれも吉備を中心とした瀬戸内地域の弥生後期末の墓制に系譜をもつことは明らかである。黒田古墳では、「石囲み」という要素こそ持たないが、両者は本質的に同じ機能を有する埋葬施設であり、近藤義郎が重視する首長霊継承儀礼の本質的な部分^(注13)を、近畿地方の有力首長層が共有する最初の段階がここにあることを示している。

4. 黒田古墳の編年的位置

黒田古墳の出土土器から、編年的な位置づけを試みることにしたい。出土した土器は、後円部の盗掘坑から出土した加飾壺と、前方部から出土した壺ないしは甕の口縁部片である。後者は、端面に面をなし、外反して立ち上がるタイプで、器壁の厚さから、第5様式系甕か広口壺の口縁と考えられる。古墳に直接伴うものでない可能性があるが、時期は後期末～庄内式期にみられるもので、少なくとも布留式に下げる要素は認められない。古墳に供献された土器であることが確実な加飾壺については2タイプあり、竹管文を付す畿内系二重口縁壺の小片と、東海系パレススタイル壺(以下、パレス壺とする)に畿内系二重口縁壺の加飾要素を付加した折衷形態をなす壺である。時期を考えるうえで、検討できる資料は、全体の8割近くを復原できる後者である。

この加飾壺の(第6図2)の特色は、口縁部受部が斜め上方に直線的に延び、端部が垂下口縁をなす点と、体部が下膨れをなすプロポーションにある。赤塚次郎が指摘するように、東海地方のパレス壺をベースに、畿内系二重口縁壺の加飾性が付加されたものと考えられる。^(注14)パレス壺と同様、垂下口縁を特徴とするため、二重口縁壺の範疇に入れるには問題を残すが、パレス壺と大きく異なるのは、口縁端部が上方へも拡張する点であり、この点を捉え、東海系二重口縁壺^(注15)と呼称することにしたい。この種の二重口縁壺の編年は、これまでほとんど論じられていないが、祖形となる壺の形態を踏まえた分類を行うことによって編年は可能と考える。

東海系二重口縁壺について、筆者は、口縁部形態からさらに2系統に分けるべきであることを、1997年に開催された「庄内式併行期の古墳出土土器」をテーマとする庄内式土器研究会の報告で明らかにした経緯がある。^(注16)一つは、口縁受部が直線的に斜め上方に大きく拡張し、口縁端部の上下への拡張が短くとどまるもの(A類)である。A類の古相を示す資料として、西上免古墳出土資料をあげることができる。この壺(第6図9)は口縁の拡張が強く典型的な資料ではないが、受部の形態はA類の特色をよく表す。廻間Ⅱ式前半に帰属する資料とされ、^(注17)近畿では庄内中～新段階におおよそ対応する。直線的に拡張する受部は、同時期のいわゆるパレス壺の短い口縁受部とは異なり、パレス壺Ⅱ式というべき加飾広口壺(第6図8)に直接的な系譜が求められる。第6図8の広口壺は、西上免遺跡S D08(墳丘墓4)から出土したもので、同じ墳丘墓を構成する溝から出土したS字甕A類の形態などから、廻間Ⅰ式後半と推定される資料である。A類は、こうした口縁部が直線的に延びる広口壺を祖形に、パレス壺の垂下口縁と畿内系二重口縁壺の加飾性を受け入れ、生成されたものとみられる。そのため、当初から拡張した受部をなす。A類の分布は、古相では、滋賀県播磨田遺跡、千葉県神門5号墳、新相では、埼玉県白井南遺跡や、千葉県神門3号



第6図 東海系加飾壺の系譜

墳など、関東を中心に分布がみられ、一部は奈良県大王山9号地点方形台状墓などにも類例がある。

東海系二重口縁壺のうち、受部の拡張がA類に対して総体的に短く、端部が大きく拡張するものをB類とする。B類は、いわゆるパレス壺を祖形として、形式変化を遂げたと考えられるものである。黒田古墳や奈良県ホケノ山古墳などに類例をみるほか、長野県弘法山古墳では、A類とB類が共伴する。パレス壺とB類には形式上のヒアタスがあるが、これを埋める参考となる資料は、滋賀県斗西遺跡で出土している。斗西遺跡の壺の特色は、パレス壺としての基本的要素を維持しつつも、頸部と口縁部受け部の屈曲が明瞭で、受部が直線的に拡張しており、東海系二重口縁壺への過渡的な様相を呈している。この資料は、

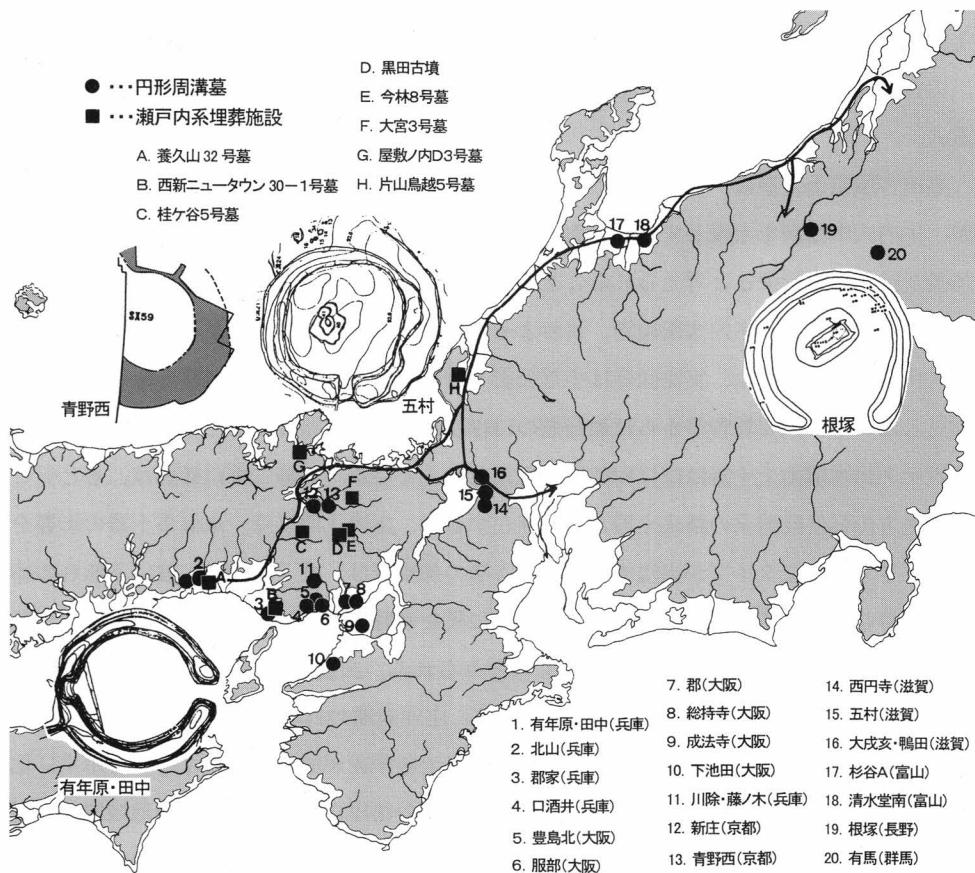
複数の祭祀により堆積した遺物層から出土したとされ、時期はおおよそ庄内中～新段階のものともみることができる。一方、B類のなかでも受部が長く拡張し、肩部が張る新しい要素を持つ大阪府加美遺跡14号墓出土の加飾壺^(注18)は、庄内式甕や退化した手焙形土器などの共伴資料から時期が明らかで、形態から布留式最古段階に位置づけられる。B類も布留式最古段階には、加美遺跡資料や、三重県四郷遺跡にみるように、口縁受部が一様に拡張を遂げるようになる。黒田古墳例は、受部の拡張が加美遺跡例に比べて未発達であり、強い下膨れの体部をなお維持していることから、加美遺跡例に先行するものであることは明らかである。

東海系加飾二重口縁壺は、口縁部の接合形態においても、2手法をみることができる。本来のパレス壺の手法をとる口縁下部に粘土帯を付して垂下口縁を作り出すものと(手法1)、受部の擬口縁を、別作りした垂下口縁内面に差込み、下方から粘土帯で補強するもの(手法2)である。手法1がパレス壺に通有にみられる接合方法であり、愛知県西上免古墳や、長野県弘法山古墳など、東海や関東、中部地方に分布する加飾壺は、基本的に手法1をとる。一方、手法2は、加飾性を強めるなかで、派生的に現れたと考えられる手法で、黒田古墳や大阪府加美遺跡例、滋賀県塚ノ越遺跡例など、近畿地方を中心に分布がみられる。

黒田古墳出土土器は、B類の祖形ともいえるパレス壺との過渡的形態をなす斗西遺跡例が、庄内式中段階を上限とすることや、布留式最古段階(寺沢布留0式)に位置づけられる加美遺跡例に先行すると考えられること、さらに手法1から派生した手法2による成形であることを踏まえ、庄内式新段階、おおよそ庄内3式に帰属するものとみておきたい。ホケノ山古墳については、実測図等はまだ公表されておらず、報告書の刊行を待って、比較検討したいが、概要報告等からは加飾壺の口縁受部の拡張は顕著でなく、黒田古墳と奈良県ホケノ山古墳出土土器はほぼ同時期の所産と考えている。加飾二重口縁壺は、もともと近畿地方の弥生後期末の祭式土器として存在するが、庄内式期以降、東海系土器の影響を受け、さまざまなタイプが出現する。黒田古墳の加飾壺は、垂下口縁に、強い下膨れの体部を維持し、同時期の畿内系加飾壺と明らかに異なる特徴を有し、東方の系譜をひく土器と認識された上で墓前祭祀に登場したものとみられる。広義の東海系土器(近江で在地化するものを含め)は、南丹波・山城・大和では、庄内式期の外来系土器の主体的な位置にあり、該期の墳墓への供献は、集落における供献土器祭祀が取り込まれたことを示すに他ならない。このことは前方後円墳という新たな墓制の創出によって、既存の地域関係が否定されるものではなく、重層的な関係を包括、維持していたことをよく示すものと言える。

5. 南丹波の墳墓と瀬戸内系要素

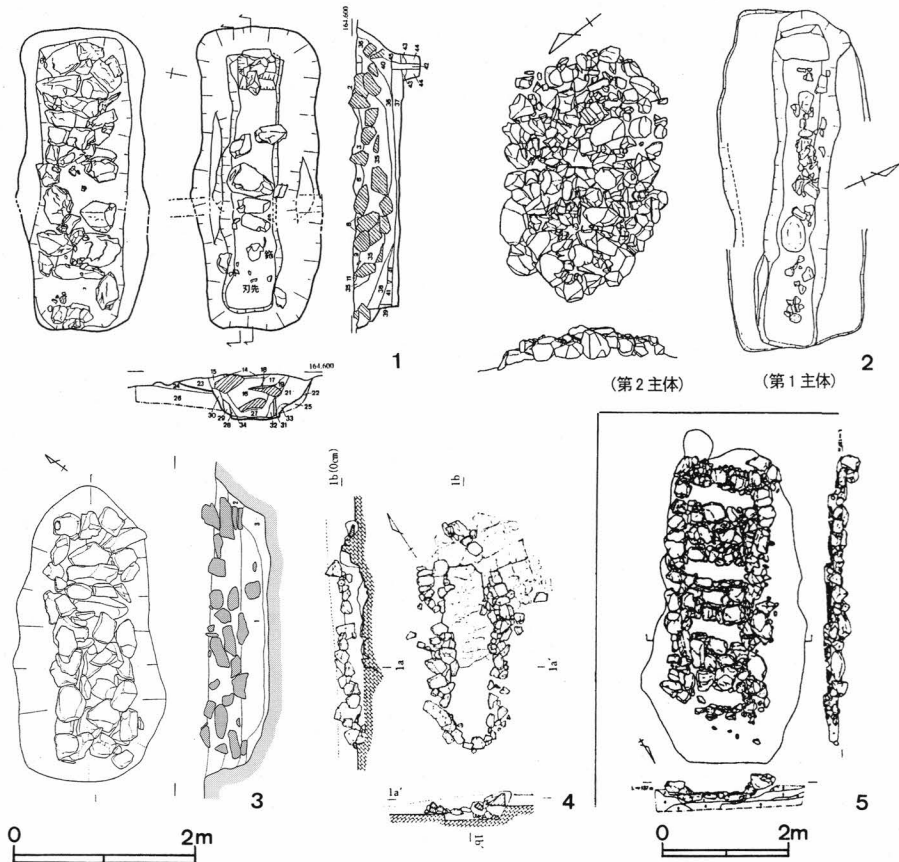
黒田古墳が出現する背景を考えるうえで、丹波と周辺地域との地域的關係をみておきたい。弥生後期末～古墳時代初頭には、北丹波と南丹波を含めて、加古川流域の西丹波を介して、播磨をはじめとする瀬戸内地域の影響が強く現れる。北丹波では、方形台状墓などの方形原理の世界に、綾部市新庄遺跡の円形周溝墓群や、突出部をもつとみられる円形周溝墓の同青野西遺跡など、新たに吉備や播磨などの瀬戸内を中心とする円形原理の墓の思想が^(注20)入る。円形原理の墓は、北丹波を介して、湖北の五村遺跡や、北陸の清水堂南遺跡、^(注21)遠くは長野県根塚遺跡や群馬県有馬遺跡など中部高地や関東にもみられ、黒田古墳出現の前夜にあって、鉄器の流通によって活性化し北近畿を經由する東西のルート上に広がるようである。瀬戸内系墓制の広域展開については、近年、森本幹彦は、弥生後期末の福井県片山鳥越5号墓にもその例があることを明らかに^(注22)しており、弥生時代以来、このルートが物流の大動脈として活性化し、播磨・丹波を介していわゆる加古川・由良川の道に、瀬戸内系の文物とその情報が、日本海沿岸部まで波及し、地域関係を強化していることが



第7図 円形周溝墓と瀬戸内系埋葬施設の波及経路〈弥生後期末～古墳初頭〉

判明している。

南丹波の弥生時代後期は、土器様相のうえでは、近江の地域圏の一端と考えられている。後期中葉～後葉の園部町波間墳墓群は方形台状墓であり、ガラス玉の多量副葬など、墳墓形態と出土遺物には北近畿との交流が窺えるものの、同時期の土器様相は、北近畿系は一部の搬入にとどまるのに対し、近江系土器は基本組成の一角を占める。こうした状況に変化がみられるのは後期末～古墳時代初頭であり、西側地域、特に瀬戸内周辺地域の影響が集落の住居形態などに現れる。亀岡市野条遺跡や、千代川遺跡では、住居内土坑に特殊な周縁帯をもつ住居が検出されているが、この周縁帯をもつ住居は岡山から播磨を中心に分布するもので、瀬戸内地域に系譜をもつ住居であることは明らかである。^(注23)南丹波は、土器様相から後期は近江系の地域圏と考えられているが、後期末には、播磨・西丹波を介して、瀬戸内地域との人的交流が活発に行われる。



1. 今林8号墓(京都) 2. 桂ヶ谷7号墳丘墓(兵庫) 3. 安楽寺谷ST1009(徳島)
4. 養久山 32 号墓(兵庫) 5. 大宮3号墳(京都)

第8図 石材を多用する埋葬施設

南丹波の前方後円墳出現期の墓制としては、前述した狭間墳墓群と同一丘陵上に展開する今林墳墓群を挙げることができる。今林8号墓からは、妻木晩田遺跡や、青谷上寺地遺跡、兵庫県村上遺跡などに類例のある朝鮮半島系の農具、踏鋤(タビ)や、獣形鏡が出土したことで知られるが、ここで特に注意されるのは、埋葬施設の構造であり、墓壇内に石材が集積する墳墓の事例があることである。方形墳である8号墓で検出されたこの主体部について、報告者の福島孝行は、本来木棺側板の周囲に配されていた石材が、棺上の石材と共に中央に落ち込んだものとする^(注24)。こうした埋葬施設は、南丹波では初例であり、系譜が問題となるとところだが、同様の墳墓の類例は、西丹波の篠山市桂ヶ谷墳墓群にあり、さらに兵庫県養久山墳墓群32号墓第1主体、徳島県安楽寺谷墳墓群、高知県奥谷西遺跡、高知県土佐国衙跡SK79など、瀬戸内沿岸部から四国に分布し、瀬戸内沿岸部に広がる弥生時代中期以来の配石木棺墓に淵源をもつと考えられる。今林例は、播磨を介して、西丹波から南丹波へと分布を拡大したものであり、黒田古墳成立の直前の庄内中段階にあって、この地域ですでに瀬戸内地域と深い関係性が形成されていることの証左と言える。

出現期前方後円墳の地域色の検討が進められるなかで、前方後円墳様式の畿内中枢からの一元的な波及・拡散や、過剰な斉一性概念への反省がなされ^(注27)、前方後円墳創出期の地域間関係の再検討が大きな課題となっている。箸墓古墳が複数の系統をもつ儀礼を内包し、昇華する形で、前方後円墳における葬送儀礼を「様式化」したことに疑問の余地はないが、そこで構成される個々の要素が統合した形で地域的に展開するわけではなく、また前段階の地域的關係を否定する形で受容されるわけでもない^(注28)。まして、定型化した「前方後円墳」成立前夜にあっては、地域色が顕在化し、前方後円墳のなかにも、円形周溝墓の系譜を引くものや、前方部に特色をもつものがあるなど、多系統が混在する様相を見せる。黒田古墳においても、墳丘形態の特色は畿内中枢にはあらず、瀬戸内沿岸部との関係性が強く現れる。また供献土器にも東海系の要素がみられるが、それらは前段階に形成された地域關係をそのまま反映しているにすぎず、前方後円墳という新たな墳丘形態の表知が、それまでの地域關係をも包括していることを示している。揖保川水系の動向を検討した岸本道昭^(注29)のいう、まさに「既存の地域的連合を破壊することなく、相互に權益を保障する双方向的な同盟・連合の關係」と言える。その上で、黒田古墳の成立意義は、箸墓古墳成立以前において、畿内中枢の首長層とともに、前方後円墳という墳丘形態とそこで執り行われる葬送儀礼を、統合した様式としていち早く実現したところにあることを改めて強調しておきたい。黒田古墳は、木槨、棺床構造、長大な舟形木棺と、ホケノ山古墳の埋葬施設に高い近似性を持ち、本質的に同じ埋葬儀礼を具現できる構造体をなしており、この段階に近畿地方の有力首長層間に首長靈繼承儀礼の実体的な共有がはじまったと見なすことができ

る。

本稿をなすにあたり、次の各氏から、ご教示をいただいた。記して、謝意を表したい。
赤沢徳明・今尾文昭・小池香津江・近藤武司・玉城一枝・近澤豊明・辻健二郎・菱田淳子・福島孝行・古川登・三好博喜・森下衛・山本三郎（敬称略）

（たかの・ようこ＝当センター調査第2課調査員）

- 注1 寺沢薫「纏向型前方後円墳の築造」（『考古学と技術』 同志社大学考古学研究室）1988
- 注2 森下衛・辻健二郎・高野陽子ほか『船坂・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』（園部町教育委員会）1991
- 注3 前掲注1文献
- 注4 北条芳隆「弥生終末期の墳墓と前方後円墳」（『吉備の考古学的研究』（上） 山陽新聞社）1992
- 注5 大久保徹也「四国北東部地域における首長層の政治的結集—鶴尾神社4号墳の評価を巡って—」（『前方後円墳を考える—研究発表要旨集—』 古代学協会四国支部）2000
- 注6 都出比呂志『堅穴式石槨の地域性的研究』（大阪大学文学部国史学研究室）1986
- 注7 玉城一枝「讃岐地方の前方後円墳をめぐる二・三の課題」（『末永先生米寿記念献呈論文集』 1985
北条芳隆「讃岐型前方後円墳の提唱」（『国家形成期の考古学』 大阪大学考古学研究室）1999
- 注8 岡林孝作「木槨・堅穴式石室」（『考古学協会 橿原大会研究発表会資料』）2002
ホケノ山古墳の調査の後、過去の調査例が再検討されるなかで、徳島県萩原1号墓が「石囲み木槨」として復原され、石野博信は、その埋葬施設の系譜が瀬戸内の阿波地域に遡源があると指摘する。石野博信「大和・箸中山古墳への道」（『初期古墳と大和の考古学』 学生社）2003
- 注9 國木健司『石塚山古墳群』（綾歌町教育委員会）1993
- 注10 石崎善久「舟形木棺考」（『京都府埋蔵文化財論集』第4集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2001
- 注11 岡林孝作（注8文献）と柳沢一男は、黒田古墳とホケノ山古墳の木槨を比較し、復原案を提示している。柳沢一男「前方後円墳と木槨」（『前方後円墳とは何か』 雄山閣）2005
- 注12 木槨の系譜に関しては、以下の論考に詳しい。田中清美「弥生時代の木槨と系譜」（『堅田直先生古希記念論文集』）1998
- 注13 近藤義郎『前方後円墳の時代』（岩波書店）1983
- 注14 赤塚次郎「壺を加飾する」（『考古学フォーラム』7）1995
なお、第6図の三重県四分遺跡出土加飾壺は、赤塚次郎氏の再実測図を使用している。
- 注15 高野陽子「畿内系二重口縁壺の系譜と展開」（『京都府埋蔵文化財論集』第3集（財）京都府

埋蔵文化財調査研究センター) 1997

二重口縁壺の口頸部分類のうち、東海系との折衷とし、D類としたものを、改めて東海系二重口縁壺とする。

- 注16 高野陽子「近畿北部地域における墳墓供献土器について」(『庄内式土器研究会第13回-庄内式併行期の古墳出土土器-』追加資料) 1997
- 注17 赤塚次郎編『西上免遺跡』((財)愛知県埋蔵文化財センター) 1997
- 注18 植田文雄「首長墓と集落祭祀」『神郷亀塚古墳』(能登川町教育委員会・同埋蔵文化財センター) 2004
- 注19 田中清美「加美遺跡」(『定型化する古墳以前の墓制』埋蔵文化財研究会) 1988
- 注20 岸本一宏「弥生時代の低地円丘墓について」(『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所) 2001
- 近澤豊明「円形周溝墓について」(『新庄遺跡』綾部市教育委員会) 1995
- 注21 中部高地への波及については、河野一隆も、考古学研究会岡山例会シンポジウムの席上で言及している。『岡山例会第5回シンポジウム三世紀のクニグニ』(考古学研究会) 2002
- 注22 森本幹彦「片山鳥越5号墓第1埋葬施設の位置づけ」(『片山鳥越墳墓群・片山真光寺跡塔址』) 2004
- 注23 都出比呂志が「灰穴炉」として注目したものである。野条遺跡、千代川遺跡のタイプは、複数の土坑の周縁をめぐる特殊な形態であるが、玉津田中遺跡から複数検出されており、播磨との関係が考えられる。都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』(岩波書店) 1989
- 注24 福島孝行・三好玄ほか「今林古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第97冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 注25 石材を多用する埋葬施設としては、北丹波では、木槨墓の可能性のある綾部市大宮3号墳を挙げることができる。綾部市教育委員会『綾部市文化財調査報告』24、1996
- 注26 多賀茂治「兵庫丹波の弥生墳墓」(『台状墓の世界』但馬考古学研究会・両丹考古研究会) 2004
- 注27 北条芳隆「讃岐型前方後円墳の提唱」(『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室) 1999
- 注28 広瀬和雄は、首長層が政治的にまとまって形成した利益共同体を前方後円墳国家とし、前方後円墳の祭祀とは、大和が各地の政治勢力を糾合した共通の墳墓祭祀であり、大和が一方的に前方後円墳祭祀をつくり、各地の政治勢力に強制したものではないとする。広瀬和雄『前方後円墳国家』(角川選書) 2003
- 注29 岸本道昭「前方後円墳の多様性-揖保川水系を素材として-」(『前方後円墳を考える-研究発表要旨集-』古代学協会四国支部) 2000

参考文献

- 寺沢 薫「畿内古式土師器の編年と2、3の問題」(『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所) 1986

- 今尾文昭「古墳時代竪穴式石槨成立の意義」(『季刊考古学』第90号 雄山閣) 2005
- 福島孝行「弥生終末期の墓制と古墳の出現」(『季刊考古学』第84号 雄山閣) 2003
- 菅原康夫「萩原墳丘墓をめぐる諸問題」(『前方後円墳を考える－研究発表要旨集－』 古代学協会 四国支部) 2000
- 小山田宏一「大阪湾沿岸の弥生時代後期の円形周溝墓」(『月刊考古学ジャーナル』374) 1994
- 森岡秀人「定型化以前の方後円墳」(『季刊考古学』第52号 雄山閣) 1995
- 奈良県立橿原考古学研究所編『ホケノ山古墳調査概報』(学生社) 2005
- 間壁忠彦ほか「岡山県井原市金敷寺裏山古墳」(『倉敷考古館研究集報』5) 1968
- 間壁忠彦ほか「岡山県真備町黒宮大塚古墳」(『倉敷考古館研究集報』13) 1977
- 斉藤忠・大塚初重ほか『弘法山古墳』(松本市教育委員会) 1978
- 直井雅尚ほか『弘法山古墳出土遺物の再整理』(松本市教育委員会) 1993
- 国木健司『石塚山古墳群』(綾歌町教育委員会) 1993
- 松村信博・山本純代『奥谷南遺跡』((財)高知県文化財団埋蔵文化財センター) 1999
- 辻佳伸「安楽寺谷墳墓群」(『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』13 徳島県教育委員会・(財)徳島県埋蔵文化財センター) 1995

